

『阿南駅周辺まちづくり基本計画』（素案）に関する意見及び市の考え方

No.	項目	意見の概要	市の考え方
1	計画全体	<p>■防災の視点</p> <p>・対象地域は、津波災害だけでなく、洪水においても甚大な被害が予測されている地域です。人を再度集めるにあたっては、災害リスクを増やすという恐れもあり、事前復興の観点からも防災に関する検討が基本計画の段階で十分に行われるべきと考えますが、不十分な検討に止まっており再度検討すべきです。（A氏）</p>	<p>本市では、昨今の災害の頻発化、激甚化を背景とした災害リスクへの対応として、阿南市地域防災計画や国土強靱化計画を策定し、防災・減災対策に取り組んでいます。また、近年の災害の現状、災害リスクを踏まえ、市内各拠点を中心とした災害対策の方針について、阿南市立地適正化計画における、居住誘導区域内等の災害に対する安全性を確保するため、ソフト・ハードの施策を位置付けた「防災指針」を作成することを検討しています。また、現在阿南市では、徳島県復興指針に基づき、平時より取り組んでおくべきことについて、作業工程を含めて整理を行い、「事前復興ロードマップ」の策定に向けた取組を進めています。</p> <p>一方で、今回の阿南駅周辺まちづくり基本計画案では、阿南駅周辺の限られたエリアでのまちづくりの基本計画であり、ご意見の通り防災に関する検討が不十分な状況にありますので、今回いただいたご意見を踏まえて、阿南駅周辺まちづくり基本計画では、課題において防災減災に取り組むことの必要性のほか、地区内における関係施策を示す部分において防災・減災の取組に配慮することを追記いたします。</p>
2	地区の導入機能について	<p>牟岐線の下を通るガード下の富岡港線の道路では、大雨の度に冠水し、通行できなくなる。また、南北を通る線路が高い壁となって東西を分断し、歩行者を遠回りさせて東西の通行を阻害している。東西市街地のネットワークの強化によって東西市街地の連携を図り、一体性・波及性を高めるのであれば、線路上下の空間を利用するべきである。それは災害時に迅速に避難しにくい問題を解消することにもなる。</p> <p>そのため、下の画像1の赤線で囲んだ空き地(富岡町今福寺21-1)を活用することを提案する。</p> <p>高架の歩道橋は津波や洪水時の緊急避難場所になり、東西通行を実現する為に土手を掘削する工事により汽車の運行を妨げることがないメリットがある。もちろん、高齢者や障がい者は上りにくいので、スロープやエレベーターを設置してはどうか。（B氏）</p>	<p>新図書館複合施設の整備に伴い牟岐線を高架で横断し、東西を連絡する通路（デッキ）の設置を検討しております。</p> <p>東西連絡通路の設置については、今後具体化の検討を進めてまいります。防災的な機能の付加等については、今後の検討にあたっての課題として取り組んでまいります。</p>
3	地区の導入機能について	<p>新図書館を市民会館跡地に建設した場合、新図書館及びひまわり会館の職員用の駐車場が不足すると思われるので、当該空き地(富岡町今福寺21-1)を職員用の駐車場にしてはどうか。商工業振興センターを利用する職員並びに市民の車で周辺が通行しにくいことがあったので、駐車場用地は必要である。阿南駅周辺まちづくり基本計画(素案)の10ページでは、図書館で重視する点として「駐車台数が多く停めやすい環境」、「車でのアクセスのしやすさ」の割合が高いことが挙げられている。だが、新図書館の整備によりある程度の駐車場スペースをとってしまうと、小規模の中途半端なものになってしまうので、近隣にある当該空き地を職員用駐車場や第二駐車場用地として確保すべきである。（B氏）</p>	<p>本基本計画は、公共空間の活用を核としたまちづくりをコンセプト及び基本方針に掲げており、現時点では民有地の活用を想定しているものではありませんが、今後、駅周辺における賑わい創出に向けた社会実験を行う中で、必要に応じて民有地の活用の可能性を検討します。</p>
4	地区の導入機能について	<p>阿南駅周辺まちづくり基本計画(素案)の8ページで「JR西側には、児童公園・芝生広場が整備されていますが、JR東側には、公園・広場が整備されていません。」との指摘があるように、東側の公園が不足している。公園は災害後に緊急避難地として使えるし、大火災時に延焼を阻止することができる。避難できる公共施設は、感染症が蔓延したときには、十分に収容できなくなるので、避難用地は必要である。車中泊やテント泊用地にもなれば、災害後の市民や来訪者の命を守れるので、当該空き地(富岡町今福寺21-1)を公園等にするべきである。（B氏）</p>	<p>駅東側については、市民会館解体跡地で新図書館複合施設の前面に緑地広場の整備を検討しているほか、阿南図書館用地においては多様な用途に活用可能な緑地広場空間の導入を検討しています。今後、駅周辺における賑わい創出に向けた社会実験を行う中で、必要に応じて民有地の活用の可能性を検討します。</p>
5	地区の導入機能について	<p>■民地の利用について</p> <p>・駅周辺は低未利用の民間用地が集積しており、まちづくりが行いにくい状況です。空いている公共用地に図書館を建てれば全て問題が解決するはずはなく、当該地区の住民を含め、まちづくりの姿を検討していくべきと考えます。駅前を含む区画整理などで駅周辺の土地利用を効率化させ、景観上も質をあげるべきと考えます。立地適正化計画もあり、さまざまな都市計画制度を活用できると思います。あえて計画を矮小化させている印象を受けます。</p> <p>・アンケートの分析が2項しかなく、まちづくり基本計画として不十分という印象を受けました。せめて性別年齢別のクロス集計などを行い、その結果を補足する形で、ワークショップやヒアリングから、まちの将来像を描いてはどうかと思います。街の将来像が恣意的な印象を持ちます。</p> <p>・工期について、公設公営が意図的に長く期間を設定しており、民間資本導入を恣意的に誘導しようとしている印象を受けました。他市事例等を丁寧にあたるべきと考えます。（A氏）</p>	<p>本基本計画では、市民会館解体跡地における整備事業を起点とした段階的な取組を推進し、エリア全体の価値を高めていくこととしております。土地区画整理事業については、効率的な土地利用を図るうえで有効な手法の一つと考えられますが、現段階では基本方針に基づき、公共空間の活用を核とした公民連携によるまちづくりを推進することとしております。</p> <p>しかしながら、駅周辺には、建物が密集しているエリアがある一方で、低未利用地も多く分布しており、計画的な土地利用の整序に向けて多くの課題を残していることから、今後も継続的に駅周辺のまちづくりの検討を進めていきたいと考えています。</p> <p>アンケートの結果については、詳細な報告書を阿南市魅力ある審議会でご報告しておりましたが、策定段階では参考資料として、抜粋版を掲載する予定です。</p> <p>官民連携手法の導入につきましては、多様な視点から検証を行い望ましい手法を策定後の官民連携事業可能性調査において検討していきたいと考えております。いただいたご意見はその調査の際の参考とさせていただきます。</p>
6	地区の導入機能について	<p>先にパブコメ募集があった案には集合住宅がありましたが、あれは今回計画案ではなくなったのですね。一回目のパブコメで指摘した点から大歓迎です。（C氏）</p>	<p>いただいたご意見を今後の検討における参考とさせていただきます。</p>
7	地区の導入機能について	<p>図書館跡地の計画は、先のパブコメで私が述べた2階建て案がベストですが、もし建物を建てないなら、この「素案」の計画に賛成です。防災の観点で最大の理由です。つぎに、ハンドルの「遊び、部分が必要なように、都市計画にも「余裕」が必要だからです。（C氏）</p>	
8	地区の導入機能について	<p>駅東側に映画鑑賞もできる視聴覚室（第1回パブコメで要望）を設けないなら、西側地域の空き家・空き地対策のひとつとして、市民活動が運営主体のミニシアターを検討してみは？アンケートにも映画館の要望があります。（C氏）</p>	
9	地区の導入機能について	<p>駅西側活性化には、高松市丸亀町商店街から学んでほしい。（C氏）</p>	
10	新図書館複合施設について	<p>新図書館への要望を送ります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 仕事や勉強かできるコワーキングスペース・自習室の設置 2. 飲食可能なテラス席の設置(フードトラックなどが日替りで来てほしい) 3. 広いキッズスペース(カーペット、畳など) 4. 建物のどこかに阿南の竹(モチーフでも)を使ってほしい。 5. 打ち合わせなどか出来るフリースペースの設置 <p>人が集まって来るような図書館になってほしいなと思っています。 よろしくをお願いします。（D氏）</p>	<p>いただいた新図書館複合施設の機能に関するご意見につきましては、担当部署と情報共有し、今後の具体的な施設検討の際の参考とさせていただきます。</p>
11	新図書館複合施設について	<p>・今では図書館必須のインターネット接続（WiFi）を完備、また100V電源利用できるように（那賀川図書館では電源利用できないので不便）</p> <p>・貸出履歴が自宅等からインターネット接続で確認できる様に（館内端末でも）</p> <p>・羽ノ浦図書館は所蔵図書の盗難、紛失が多い様に思う。以前県立図書館で県外の図書館から取り寄せてもらった書籍にはICタグが付いていました。税金で購入した資料を大切にもらいたい。</p> <p>・利用者の利便性を考えて、月曜日に3館同時に休館日にしないでほしい。（E氏）</p>	

No.	項目	意見の概要	市の考え方
12	新図書館複合施設について	<p>計画周辺地域にあるひまわり会館や富岡東中学校など公的施設の2階以上は市が緊急避難所に行っていることが考慮された形跡がありません。このことは以前のパブコメでも指摘したことです。とくに貴重な図書や資料が保存される図書館計画に災害時の考慮がないことは決定的に欠陥のある計画と言わざるを得ません。</p> <p>私は図書館や羽ノ浦町・那賀川町で保管されている資料も含めた郷土資料館は阿南市文化会館周辺や洪水・津波の恐れがない新野町地域に建てるべきだと思います。図書館と資料館が離れたところにあることは不便ですが、少なくとも資料館は文化会館周辺や新野地域に建てるべきだと思います。その際は、私が7月3日付文書で要望した佃實男らの郷土作家館を併設するのも一つの考えです。図書館分館にすれば、閲覧・貸し出しともに可能です。そうすれば、たぐいまれな文学館となります。(C氏)</p>	<p>新図書館複合施設の災害時の施設整備上の対応については、今後の具体的な施設整備検討の段階で考慮する予定です。図書館には貴重な図書や資料が保管されることから、いただいたご意見は施設整備検討の段階の参考とさせていただきます。また、図書館機能に関するご意見につきましては、所管部署へ情報を共有いたします。</p>
13	新図書館複合施設について	<p>市民が「個室で学習・研究・テレワーク等を行う」「個人ブース」設置は大反対です。「個人ブース」がある図書館は見たことありません。図書館は自習室ではないのです。私は反対ですが、一人しか使えない机をいっぱい置いていた荒川区立図書館にもさすがに「個人ブース」はありませんでした。「個人ブース」は特定の限られた人の空間占有度が高まります。もっと露骨に言えば、空間の私物化となります。</p> <p>また図書館機能に持たせるとしている「交流機能」は、ほとんど公民館や市文化会館、コスモホールが果たすべき役割であって、それを図書館に求めていること自体が本末転倒です。(C氏)</p>	<p>新図書館複合施設への導入機能の一つである学習・研究機能は、市民が個室や共有スペース等で学習・研究等の活動を行う場として想定しておりますが、現時点では具体的な検討には至っておりません。今後、各機能の具体的な検討を行う中で、他市の事例やいただいたご意見を参考とさせていただきます。</p> <p>また、まちづくりの基本方針として「新たなにぎわいと交流の創出」を挙げていることから、新図書館複合施設においても、多様な機能の提供による幅広い市民活動及び市民同士の交流を生み出すことを目的と位置づけ、「交流機能」を導入する機能の一つとしています。</p> <p>なお、新図書館複合施設の整備予定地は、ひまわり会館と隣接していることから、一体的な複合拠点として連携し、諸室の相互利用等、効率的な施設運営に向けた取組を進めることとしています。</p>
14	新図書館複合施設について	<p>この「基本計画」(案)を読み、那賀川と羽ノ浦の図書館を含めて市全体の図書館機能を総括・検討されていることはすばらしいと思ったのが第一印象です。そのうえで問題点や疑問点等についてつぎに述べます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私が7月3日付でご意見申し上げた郷土作家に関して、まったく言及がなく残念です。郷土作家を紹介することは「阿南らしさ」のなかに含まれるのではないのでしょうか。最小限、佃實夫や北條民雄ら著名な郷土作家コーナーは設けるべきだと考えます。 ・図書館は歩いて行ける距離にあるのがベストで、北欧の図書館はそうだと、藍住町と那賀川町の図書館を創設した元県立図書館の専門職員がその著書で述べていたことを記憶しています(棚橋満雄『徳島県の図書館』)。この意味から、私は阿南市では各地の公民館図書室がその役割をできるだけ果たしてほしいと願っています。現状は申し訳程度の、それも古い書籍が置かれているだけで、多用途にもつばら流用されています。ですから基本計画案に「学校・公民館等の施設や地域の読書グループ等の多様な主体と連携し、資料面での支援だけでなく、互いに情報や課題を共有しあう図書館サービスネットワークを構築」「公民館等身近な公共施設等での貸出・返却サービス提供の検討」とあるのは希望です。 ・「静寂な空間と適度なにぎわいのある空間等、適切な音のゾーニングがされた利用空間の提供」は徹底していただきたい。「読書に集中できる個人用閲覧席」とは「個人ブース」のことでしょうか？ 図書館自体が「読書に集中できる」環境でなければなりません。「施設内での飲食可能なスペース」はどこに置こうとされているのでしょうか？ こういうスペースが閲覧室から目や耳に入ることはそれ自体が芸術鑑賞で言う「ノイズ」になり、図書館の静謐な環境とは相いれないものです。 ・表3-7「グループ利用」のうち、「趣味の活動やグループで交流したい」「音楽やダンスなどの活動をしたい」以下のほとんどは、上記3で述べたように、ほとんど公民館等に求めるべきものです。「気兼ねなく飲食したい、会話したい」「丸1日図書館で過ごしたい」などを図書館に求めるのは論外です。また「商店街と競合しない」ことを望む駅前側商店街の意向にも反します。 ・図書館は他地域に建てるのがベストですが、もしここに建てるなら、公的施設2階以上は緊急避難所としての機能を発揮すべき一定の空間が必要です。同時に最低2階以上に図書館機能を置くべきですから、「グループ利用」のスペースを2階部分にたくさん置く余地はないと思います。(C氏) 	<p>現段階では新図書館複合施設における諸室の配置計画の検討は行っておりませんが、今後、具体的な検討を行う段階において、音のゾーニングも考慮した各機能の配置を検討します。</p> <p>いただいたご意見を今後の検討における参考とさせていただきます。図書館機能に関するご意見につきましては、所管部署へ情報を共有いたします。</p>
15	実現化方策について	<p>「民営民営」と「公設公営・公設民営」が二者択一とされていますが、民営導入はよほど慎重な検討が必要です。他県の例のプラス・マイナスを充分吟味してください。一般論としては、ヒヤリングにあった「直営方式が最も地域貢献度・公益性が高い」という意見に賛成です。たとえば、指定管理者制度ではつぎのような問題点が指摘されています。①公の施設がビジネスの道具に、②住民サービス低下のおそれ、③特定事業者との癒着のおそれ、④雇用問題の発生、(以上『新自治体民営化と公共サービスの質』)、⑤議会の関与が弱まる。ヨーロッパでは民営が破綻して再公営化がすすみ、そこから直接学んだ杉並区長が実践しようとしています。(C氏)</p>	<p>施設の整備、管理運営を行う際、民間企業の合理性と運営のノウハウ等を生かして、より魅力的な施設の整備・運営が期待できます。そのため、基本計画では、公民連携によるまちづくりを基本方針の一つとしております。</p> <p>今後の整備運営手法の具体化にあたっては、利便性、効率性、採算性、魅力づくりなど、多様な視点から検証を行い、最適な手法を官民連携事業可能性調査において検討していきたいと考えております。いただいたご意見はその調査の際の参考とさせていただきます。</p>
16	その他	<p>■駅周辺整備との結びつきに懸念 『阿南市立新図書館基本計画(案)』が、駅周辺整備ありきで進行していることは明白だ。しかしこのアプローチは、図書館を単なるまちづくりの付属品と見なし、その本質的な役割を曖昧にしていると感じる。「公共空間の有効活用と駅周辺のにぎわい創出」、「図書館がまちづくりの核として」などの考え方は、図書館の本来の使命とは関係が薄く、純粋な図書サービスの提供に焦点を当てているとは言い難い。</p> <p>このような動機からは、最適な図書館の実現が難しいのではないかと考える。「阿南駅周辺まちづくりビジョン」に図書館を組み込むこと自体が、図書館の使命や役割に反するものと捉えざるを得ない。駅周辺整備とは完全に切り離すべきである。(F氏)</p>	<p>現在策定中の『阿南市立新図書館基本計画』では、新図書館を阿南市の新たな中央図書館と位置づけ、図書館の基本的なサービスの充実について基本方針を定め、そのうえで、「賑わい・交流を生み出す中心施設」として図書館が持つ情報資源やネットワークを活用し、地域の魅力や特色を発信することで、阿南駅周辺エリアの活性化にも貢献することとしています。</p> <p>一方、まちづくりの視点からは、新たな図書館がこれからのまちづくりの核となるものとして捉え、駅周辺のまちづくりと新図書館整備の相乗効果によりさらなる賑わいを生み出すことを前提として『阿南駅周辺まちづくり基本計画』を検討しております。</p>
17	その他	<p>■大義に基づいた建設地の検討が肝要 「計画策定の趣旨」において、「近年阿南駅周辺市街地の空洞化が進行し、中心拠点としての機能低下が危惧」との記述がありますが、ここで逆の視点を考えてみることも重要です。中心拠点としての機能を、必ずしも阿南駅や富岡地区に拘束する必要があるのでしょうか？ 行政運営において最も重要なのは、事業の背後にある大義が何であるかという点です。大義とは、「阿南市総合計画」などの上位計画や都市計画法に照らしてさえも、さらに高次元の価値観であり、最も基本的な指針であるべきです。</p> <p>建設地の選定においては、この大義に沿った視点が欠かせません。大義に合致しないと判断される場合には、既存の上位計画に囚われず、柔軟な見直しを行うことが求められます。上位計画や既定の都市計画を盲目的に奉じるのではなく、常にその背後にある大義を念頭に置いた阿南市の発展の模索が求められる。</p> <p>『阿南市立新図書館基本計画(案)』は、「知と人が集い、輝きまちの未来を育む創造交流拠点」という基本理念を掲げています。しかしながら、図書館は、明確に文化への深い理解を持つ人々や地域に対する支援機関であるべきであり、他の自治体でも通用するような漠然とした美辞麗句や抽象的な理念では大義が見えない。基本理念の中にこそ、以下で述べる「世界遺産のまち」などの「阿南らしさ」の言葉を盛り込み、強調すべきである。</p> <p>阿南図書館は市を特筆する文化と親和性の高い地に再建すべきであり、そしてそれが阿南駅周辺部や富岡地区でなければならない必要性がどのようにして生じたのか、明確に理解することができません。(F氏)</p>	<p>本計画は、上位計画である『阿南市総合計画』、『阿南市都市計画マスタープラン』、『阿南市立地適正化計画』に即す計画として策定するものであり、本計画の対象地区である阿南駅周辺の拠点としての役割は、それら上位計画の考え方を前提としています。</p> <p>そのため、本計画においては阿南駅周辺地区を中心拠点として、新図書館複合施設をはじめ各種機能の導入を検討することについてご理解ください。</p>

No.	項目	意見の概要	市の考え方
18	その他	<p>■“中心部の図書館ニーズ”に疑問 阿南市は、その発足当初から今日に至るまで、大きな変化を遂げている。市の発足当初においては、富岡地区が市内の他の地区よりも経済的な収益を上げていたからこそ、その恩恵を繁栄の形で還元する対象も富岡地区であり、さらに中心拠点がおかれる大義名分が存在したという視点を考慮すべきです。 重要なのは、大きな産業が特定の土地に根付き、繁栄を築いた後、その土地が中心拠点として発展していくという普遍的な事例が存在している点です。この事実を無視することは、自治体の発展戦略において健全とはいえません。 現代の阿南市を牽引する要因は、間違いなく光(LED)産業だ。『阿南市立新図書館基本計画(案)』でも多くの部分で、光産業を讃える記述が見受けられる。しかしながら、光産業は内陸部の新野町発祥であり、同じく内陸部の長生町出身者や新野町民が創業しました。また現在の本社所在地の上中町も内陸部に位置し、いずれも従来の中心部の富岡とは隣接もせず、縁は薄い。 これら内陸部の町々は都市計画区域に含まれていない地域です。すなわち従来の富岡中心モデルではこの地域を都市化の対象として捉えていません。しかし、現在の阿南市は、これら内陸部の成功を活用して、富岡地区などの沿岸部の成長を支えている構造が存在しています。 現代の阿南市が成功を取めた背後には、内陸部が果たした功績が大きい一方、行政側はその地域の潜在力を軽視していました。私たちが今必要とするのは、内陸部への尊重と感謝の念を持ち、還元することであるべきだろう。 それも、申し訳程度に、内陸部に光産業の記念碑や看板を設置したり、都市計画区域を拡張して都市全体の一員として内陸部を迎え入れる程度の対応では十分とはいえない。むしろ、阿南市の中心拠点を内陸部に移転するべきであり、それほどに大きい貢献を内陸部はしていると言えるでしょう。 市発足以来キャプテンを続け、行政により都市化を進められてきた富岡地区付近には、すでに人口や市街が積み重なっているのは当然だ。ゆえに、調査すればその地域の図書館ニーズが高いデータがはじき出されるのも当然です。 ただし、これが理由で引き続き富岡地区に図書館を維持させることが合理的であると主張するのは疑問です。光産業の原点であり、かつ地理的に富岡地区に縁の薄い内陸部の視点では、その理屈を理解することは難しい。 内陸部の視点に立つと、成功を取めた一方で、行政が内陸部の成長や都市化一向に積極的に取り組もうとしない阿南市からは独立し、自らの税収は自らで使い、内陸独自のまちづくりを進め、図書館も自ら建設するほうがはるかに合理的だからだ。 「市立図書館が抱える課題」で挙げられている「市民ニーズが大きい市中心部において十分な図書館サービスを」の記述は、たんに富岡地区の既得権益を優先しようとする意図を含んでいると捉えることも可能だ。図書館の建設や運営、そしてそこで働く職員に使われる資金は、内陸部がもっとも貢献して生み出したものという側面を軽視してはならない。 現代の阿南市において、富岡を中心とみなす大義は希薄になりつつあり、阿南市は内陸部に焦点を移す必要があります。すなわち市は、一見すると人口が少ない地域の、人口を増やす使命を担っています。そのため、従来の阿南市づくり路線を前提にした市内の人口動向を図書館の再建場所の根拠とすることは、行政自体の使命を果たさないことになる。(F氏)</p>	<p>『阿南市立地適正化計画』では、本市の将来都市構造の考え方として、都市機能の集積をめざす「拠点」を中心とした多極ネットワーク型拠点の構築、多極ネットワーク型拠点と周辺地域、拠点間を連絡する公共交通軸の形成、阿南市都市計画マスタープラン等との整合性の確保を挙げています。そのなかで、市の中心となる市街地が形成されるとともに各種の都市機能が集積し、道路等の都市基盤が整備された地域である阿南駅周辺地区については、「都市拠点」と位置づけています。都市拠点では、都市機能の誘導の考え方を「市民の多様な学びを支えるとともに日常生活から離れた娯楽や憩いを楽しむため、全市民的・広域的な教育、文化、情報、娯楽などの都市機能の集約を図る」としています。</p> <p>また、本市では阿南図書館を同計画における誘導施設として位置づけています。</p> <p>これらの拠点の位置づけは、阿南市として、昨今の全国的にみられる人口減少社会、及び阿南市でみられる人口減少の状況等から懸念される問題を踏まえた「多極ネットワーク型都市構造」の形成を目指すという考え方が前提にあります。また、拠点の位置づけについては、都市計画区域内外の関係、並びに現状の民間施設を含む都市機能の集積状況、人口の集積状況、都市基盤の整備状況等を総合的に勘案し設定しています。</p> <p>また、阿南市には、豊かな自然環境や市内各所にみられる歴史文化等の地域資源が身近にあることから、このような立地特性を生かしたまちづくりを基本方針の一つに位置付けています。</p> <p>図書館においては、これまでも中心拠点における社会教育施設として機能してきました。また、図書館は市民ニーズも高く、駅周辺地区での早期の整備を望む声も多いことから、阿南駅周辺の中心拠点において整備を検討しています。</p> <p>本市ではこれらの上位・関連計画の考え方等に即して本計画の策定に取り組んでいますのでご理解ください。なお、文化財に関するご意見につきましては、担当所管部署へ情報を共有いたします。</p>
19	その他	<p>■光産業の源流地は富岡中心路線に納得しているか そもそも、市中心部と周辺部の位置づけが従来のままで、市民から本当に理解されているのかに疑問が残ります。近年になって意識調査が行われた形跡も見当たりません。特に、光産業の源である新野地区が、現行の市の富岡中心路線に対して本当に納得しているのかどうかは、行政にとって深刻に検証すべき重要な課題です。</p> <p><光産業の原点が富岡中心に納得しているか疑わしい根拠① 市議の要望“新野にLEDの看板を”> 2013年(平成25年)6月12日、阿南市議会で行われた質疑応答の場面(画像1、2)。 当時の市議、林孝一氏が新野町におけるLED(会社)産業の起源を強調し、“LED会社の発祥地がある新野町の平等寺〜新野駅の間、LED(会社)発祥の紹介のための立て看板を設置してはどうか?”と提案しました。 これに対し、粟飯原佳明産業部長は慎重な検討が必要とする答弁を行いました。光産業の起源地域では、光産業の象徴的な存在を新野に位置づけることが望まれている意向が存在しているといえる。地域住民の願望と市の方針との間に一致しないギャップが存在しています。</p> <p><光産業の原点が富岡中心に納得しているか疑わしい根拠② 高校再編にみる新野側の大きい反発> 2012年(平成24年)5月24日に行われた旧新野高校と旧阿南工業高校の再編に関する説明会。当時の新聞記事には、旧新野高校側からの大きな反対の声が響いた様子が報じられています。 反対派住民は「阿南市街地に高校が極集中する。地域全体のことを考えてほしい」(読売新聞徳島版2012/5/25)、「一極集中の配置はおかしい」(徳島新聞2012/5/25)とコメントしている。 この説明会で注目すべきなのは新聞記事の写真を見ても分かるとおり、反対意見が相次ぎ、横断幕のぼり掲示が目立つ場面も見受けられました。近年の阿南地域において、稀ほどの大規模な住民反対運動が巻き起こりました。 この高校再編は県の事業ではあるが、県と市の違いにかかわらず共通している、富岡中心路線、富岡集約路線のまちづくりが本当に納得されているのであれば、こうした混乱は生じていなかったはずだ。</p> <p><光産業の原点が富岡中心に納得しているか疑わしい根拠③ 新野「出前市長」の声> 2021年(令和3年)7月1日、新野公民館で行われた「出前市長」イベント。その際、市役所のウェブページに掲載された質疑応答のイラストが示すところによれば、参加者から「(市の)中心機関が沿岸部に集中していることが問題だ」との声が上がりました。 また、防災の観点から、庁舎のサテライトオフィスや道の駅を、防災性の高い新野地区に設置し、市の第二の防災拠点とする提案も行われました。 このイベントの「アンケート集計結果」によれば、以下のような意見が見受けられます。 ○各地域の相乗効果を生むような政策対応を(トレードオフにならないよう)。 ○阿南南域の活性化のための防災事前復興。 ○市南部の過疎対策。 ○高規格道路の実現。 ※出典:第16回「出前市長」開催状況 https://www.city.anan.tokushima.jp/docs/2021052400028/#dema16 こうした意見から明らかな通り、防災の観点だけでなく、市南部地域の成長も求められています。常識的に考えて、市南部の成長や過疎対策などを願う地元市民が、その地域が産み出した光産業の恩恵を富岡にのみ集中させる現行構造に対して、積極的な賛同を示しているとは言い難い状況です。 市の未来を形づくるために重要なのは、光産業の起源地である内陸部による、富岡中心路線にどれほど納得しているかどうかの意思表示を待つことなく、行政が積極的に内陸部中心のまちづくりに向けた舵取りを行うべきことでしょう。 これらの根拠から、光産業の起源である新野地区が、現在の富岡中心路線に本当に納得しているのか疑わしいと言えるでしょう。(F氏)</p>	
20	その他	<p>■文化拠点、としての富岡の実態に懸念 図書館は文化の拠点であり、その設置目的は市内の文化力を最大限に引き出すことにあります。従って、阿南図書館の再建場所は、市内で比較的高い文化力を持つ地域であるべきです。これによって、その地域の文化力を強化し、阿南市全体の文化的魅力を最大限に発揮することができるでしょう。 この観点から考えると、市が再建を進めようとしている富岡地区が本当に最適な選択肢なのか疑問が生じます。 『阿南市立新図書館基本計画(案)』では、「市の概要」の「文化・産業」の中で、以下の項目が列挙されています。 古墳、阿波水軍、四国遍路、辰巳工業団地や大湯新浜工業団地、石炭火力発電所、「光のまち阿南」、北の脇海水浴場、伊島、蒲生田岬。これらについて検証する。 しかし、辰巳工業団地や大湯新浜工業団地、石炭火力発電所、「光のまち阿南」は、産業文化に分類されるものの、工業団地や発電所は単なる企業誘致であり、その地に根付いた文化とみなしてよいのかは疑問です。なかでも発電所は最終的には環境への影響を考えると煩わしい存在と言えるでしょう。こうした施設を誘致する際の見返りや税収を行政が重視しているとの見方もあり、稼働内容が真に市に意義があるとは言いがたいのが実情です。 工業が大きな存在感を持つ市は、全国各地に数多く存在します。「光のまち」以外に特筆すべき点はほとんど見当たりません。 続いて、北の脇海水浴場や四国遍路についてですが、図書館の存在がこれらの観光文化をより深化し最大化するサポートを提供できる可能性は考えられます。ただし注意すべきは、北の脇海水浴場が「全国渚百選」に選ばれているとは言え、同様のレベルの海水浴場が全国には残り99ヶ所も存在しています。阿南市は、市の特徴を示す際に同海水浴場を強調される傾向がありますが、客観的に見れば過剰な評価とも言えるでしょう。 また、古墳の歴史文化についてですが、『阿南市史第1巻』(出版当時は羽ノ浦町・那賀川町は他市町村)(P113)によれば、阿南市内には8ヶ所の古墳が存在しており、その中でも「国高山古墳」(桑野地区・内原町)が重要視されています。これは市内において前期の古墳として特に注目されている。このことから明らかなように阿南市で古墳と言えば、桑野地区・内原町が最も顕著な存在といえます。 また阿波水軍や、伊島や蒲生田岬といった自然景観については椿地区や伊島地区を尊重すべき文化です。 これらの事実から、「光のまち」と四国遍路、国高山古墳、阿波水軍、伊島、蒲生田岬は特筆性が高く、図書館によって文化振興を深める価値が高いと言えるでしょう。これらと地理的にも文化的にも縁の薄い富岡地区を、図書館を要するほどの文化拠点とみなすことは理解しがたい。(F氏)</p>	

No.	項目	意見の概要	市の考え方
21	その他	<p>■阿南行政は客観的に市内を見ていない。 阿南市の行政や文化当局は、市内の豊かな文化や産業などを十分に評価していないように思われます。しかし、一方で外部の視点、例えば国からの客観的な視点では、阿南市内の特性や価値を適切に分析しているように見受けられる。 令和4年現在、国が指定した文化財は阿南市内に7件存在しており、その内訳は以下の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●八棒神社(長生町) 3件 ●人形浄瑠璃(新野町) 1件 ●阿波遍路道(加茂谷地区、桑野地区、新野地区、福井地区) 1件 ●若杉山遺跡(水井町) 1件 ●弁天島熱帯性植物群落(橘町) 1件。 <p>これは、市の宝である文化資源が内陸部に偏在している現実を示しています。とりわけ阿南市は四国遍路の潜在力を過小評価しすぎていると言えるでしょう。 四国遍路は、本市の伝統的な竹産業とも密接に関連付けることができ、阿瀬比町から新野町を経由し福井町にかけての竹が群生する巡礼道は、環境省が認定した「四国のみち」とも重なっており、同コースは「竹林とスタチ香るみち」と名付けられている。また、四国遍路は文化庁の「日本遺産」にも認定されており、さらには世界遺産への登録を目指した活動も盛んです。(F氏)</p>	
22	その他	<p>■世界遺産への対応が皆無 客観的に国の省庁も認める阿南市内の真に価値のある文化要素を俯瞰すると、行政機関のもっとも下部組織である阿南市の文化拠点となる図書館がいま果たすべき最も重要な役割は、世界遺産の誕生を支援することではないか。 文化の保存や普及において、図書館は不可欠な存在であり、世界遺産に関連する資料や情報の提供、研究の支援、地域の歴史や価値の啓発など、多岐にわたる文化アシストを担当する役割を果たすべきです。 もし世界遺産に認定された後の阿南市において、四国遍路の巡礼路や平等寺、太龍寺は、阿南市を象徴する最も重要な要素となるでしょう。インバウンド観光客らが屋久島、白神山、姫路城、原爆ドーム、厳島神社などの地元自治体を思い浮かべる際に、その世界遺産登録物以上に連想されるものはまず存在しないと断言しても過言ではないだろう。 阿南市の図書館の展示分野においても、四国遍路の関連資料は最も顕著な一角を占めざるをえなくなるだろう。 しかしながら、驚くべきことに、阿南市の行政においては四国遍路が隅に追いやられた存在のように認識されているようです。『阿南市立新図書館基本計画(案)』には、「世界遺産」の文字もみられず、近未来の阿南市における重要な文化的展望としての世界遺産に対する支援方針が何も明記されていない。さらに、その取り扱い単なる駅前公共事業の飾り物にも思えます。 市の現状の文化に対する姿勢は、文化の核心を見逃していることが明確に感じられます。 例えば、四国遍路の一翼を担う平等寺は、動画サイトでのライブ配信やリモート参拝の取り組みがNHKの全国放送番組『あさいち』や全国紙で注目を集めるなど、主体的に地域文化の活性化に取り組んでいます。 しかしながら、こうした地元での意欲的な努力に対して、阿南行政は文化的な後押しや門前町の観光都市化などといった支援姿勢をまったく見せていないように映ります。 1200年の歴史を誇り世界遺産に手が届くかもしれない四国遍路よりも、歴史が半分程度の630年の牛岐城址の公園をそれ以上の象徴のように熱心に前面に押し出している姿勢は、四国遍路の世界遺産登録に向けた取り組みをしている四国四県の方針との整合性がとれておらず、行政として適切な方向性とは言い難い。 さらにいえば光産業は平等寺の門前町発の産業である。この事実から、阿南市の基盤を牛岐城の城下町に求める通説は誤解であり、実際には平等寺の門前町が現在の阿南市の基礎であると考えるのが正確です。 外部の視点から客観的に見ると、「世界遺産」四国遍路や、各省庁が認定した文化資産の所在地の事実からも、これまでの阿南市が実際には、文化力が比較的に市内の他よりも高いとは言い難い富岡地区を過大評価していた疑いが生じます。したがって、文化拠点としての図書館が富岡に位置するのが適切であるかについて疑問が生じます。(F氏)</p>	
23	その他	<p>■環境の変化を考慮していない 現在、阿南市の最も特筆すべき文化的特徴は「光のまち」ですが、近未来の阿南市で世界遺産が誕生してからは、世界遺産がそれを凌駕する存在感を持つことでしょう。 その時、世界遺産に興味を持つ市民やインバウンド観光客などは、阿南駅周辺や富岡地区を必ずしも拠点とする必要はありません。実際には、阿南市内で世界遺産に最も近い駅は新野駅となりますが、仮に鉄道を考慮しなくても、阿南の文化行政は阿南駅周辺や富岡地区ではなく、世界遺産の地元の加茂谷地区や新野地区の振興につながることをなによりも重視すべきでしょう。 仮に世界遺産を無視して考えても、「光のまち」の原点は新野地区に位置します。「日本の電気学の祖」とされる橋本宗吉も新野地区にゆかりがあります。「光のまち」文化は、新野地区を含む内陸部に焦点を当てべきものであり、この点からも文化行政の拠点はやはり阿南駅周辺部や富岡地区であるべきではないと言えます。 <3つの図書館が集中する> 阿南図書館を富岡地区に再建すると、羽ノ浦図書館や那賀川図書館と合わせて阿南市北部に3つの図書館が集中し、市内の地域バランスが著しく崩れます。富岡地区は羽ノ浦地区や那賀川地区の近隣であり、この状況であっても富岡地区住民が不便だと主張したり、「市の中心部として必要」などと見栄のような理由で正当化することは贅沢に過ぎる。市南部の理解が得られない。 万が一にも、富岡地区に図書館を設置する必要があるならば、富岡地区の公民館の改修によって図書館施設を付加する方法も検討されるべきでしょう。 <富岡の交通拠点性の低下> 阿南市は鉄道から高速道路へと時代の変遷を遂げます。県南部において鉄道の利用減少が問題とされる背景には、県南地域の住民が車を利用し、特に富岡地区を避けて長生地区を経由することに利点を感じていることがあります。更に、阿南市での高速道路の開通はこの傾向を一層促進します。 牟岐線の阿南駅から牟岐駅間の輸送密度は690人ですが、対照的に国が予測した桑野道路の交通量は1万4千台に達します。また、徳島駅から阿南駅まで普通列車を利用した場合、平均的な所要時間は45分かかりますが、徳島沖洲ICから美波町・日和佐出入口まで高速道路を制限速度70km/hで巡航すると37分ほどで到着できる計算となります。 こうした事実を考慮すると、阿南駅や富岡地区を中心拠点とするアプローチはこれからの時代はもはや現実的でないことが示唆されます。富岡にこだわる必要性が理解できません。 <道の駅凍結との整合性に疑問> 2020年(令和2年)2月、阿南市は新野インターチェンジ付近に予定していた新しい道の駅の整備計画を凍結すると発表しました。当時の新聞記事(徳島新聞2020/2/20)によると、市はその理由を「採算性が懸念されるため」と述べ、表原立磨市長は「将来的に市の財政負担が生じないよう、計画を見直したい」と述べました。 しかしながら、たった3年後の2023年現在において、財政状況に大きな変化はないはずなのに、阿南駅周辺整備ないし図書館再建事業は、同じような財政負担に関する議論が見られません。 比較的に豪華絢爛な規模を求める市民要望や現場要望を容認しながら、順調に計画が進められているように見受けられ、不公平を感じます。 ”将来的な財政負担”の整合性がどのように取られているのか疑問です。 また、先述の通り、県南部や阿南市内の交通環境は、鉄道よりむしろ高速道路の利用がますます増えると予想されます。阿南駅の乗降客数は2千人強ですが、新野「道の駅」付近の福井道路の国が予測する交通量は1万台を超えます。 将来性についての懸念要因は、むしろ阿南駅のほうが大きいと感じられます。常識的に考えて、阿南駅にこだわる事業には新野「道の駅」への対応以上に説明を尽くすことが求められるのではないのでしょうか。(F氏)</p>	

No.	項目	意見の概要	市の考え方
24	その他	<p>■阿南図書館は市南部に再建せよ 「阿南市立新図書館基本計画（案）」への疑義 ●駅周辺整備とは独立して検討すべき課題であり、基本理念が抽象的だ。 ●富岡中心の重要性は薄れ、内陸部の貢献に焦点を移す必要がある。 ●富岡の図書館ニーズが高く出る調査結果には注意が必要。 ●富岡中心路線に光産業の源流地区が本当に同意しているか疑問である。 ●3図書館の市北部偏在、富岡地区の交通拠点性低下、他事業との整合性に疑問。 ●上位機関の国も認める価値を備え、図書館の取扱いでも大きい存在感が見込まれる「世界遺産」への対応がみられない。 ●四国遍路や光産業と調和する場所に再建が必要である。 これらを総合的に考慮すると、富岡地区での再建を見直し、市南部での再建が適切だ。（F氏）</p>	
25	その他	<p>■阿南駅を本当にそこまで死守すべきか 阿南市は、阿南駅を中心に据えたアプローチを、不可欠なものとして長らく堅持してきました。しかしながら、その戦略が実際に阿南市全体や県南部にとって有益なのか、この重要な観点を見直すべき時期が訪れているかもしれません。従来の方針を漠然とした情性で追認するだけでは、未来志向の前向きな阿南市づくりとは言えません。阿南駅周辺の整備に携わる人々は原点に立ち返って、市近辺の交通の成り立ちを理解する必要があります。 <当初案は内陸コース> 徳島県の鉄道敷設に尽力した名西郡石井町の衆議院議員兼実業家、生田和平（明治10年生～昭和30年没）は、明治45年に「阿南鉄道株式会社」を設立しました。生田は同社の代表発起人かつ社長を務め、この鉄道会社は当時の徳島県において「阿波鉄道」と並ぶ2大私鉄となり、大正5年に小松島市中田駅から阿南市羽ノ浦町古庄駅の区間を開業しました（『阿波学会紀要第41号 総合学術調査報告 那賀川町』）。 『新野町民史』によれば、この鉄道の当初の敷設計画は新野町馬場の新野駅を終点とし、長生村や桑野村からも出資を募っていたことから、古庄から新野までの間は中野島南島、長生、桑野を経由するコース（のちに「平地線案」とよばれるコース）を意図していたことが分かります。 生田は阿南市と直接的な縁がない石井町の実業家であり、その阿南市外の客観的な視点から阿南市の鉄道コースに内陸部を選択した事実は軽視できません。 <内陸コースの10年後に沿海コース> 大正10年、新野町役場は関連町村によびかけ「阿陽鉄道期成同盟会創立大会」が開催されました。大正12年には、敷設免許申請書が県庁を通じて鉄道院に提出されました。この計画では、「阿陽鉄道株式会社」を新たに設立し、やはり阿南鉄道古庄駅から中野島、長生、桑野、新野馬場までを結ぶ「平地線案」が提案されました（『阿波学会紀要第41号』、『新野町民史』）。 一方で、「阿陽鉄道」に対抗するために、大正11年には富岡町などが「富岡町鉄道敷設期成同盟会」を結成しました。この同盟会は、「沿海線案」として富岡、見能林、橋を経由するコースを提案し、その陳情と嘆願を行いました（『阿波学会紀要第41号』）。 「平地線案」が初めて阿南鉄道として計画されたのは明治45年でした。一方、現在の阿南駅が位置する「沿海線案」が提唱されたのは大正11年であり、10年の期間が経過しています。 阿南地域において沿岸部を経由する交通文化は歴史的には必ずしも中心的なものとはされていなかったことが示唆されます。 <誘致合戦中の各地区のスタンス> こうしたなか政府が官営鉄道の「四国循環鉄道 阿土海岸線」の実現に動き出したことを受け、昭和2年に阿陽鉄道、富岡町鉄道敷設期成同盟会、阿南鉄道の3つの私鉄組織は新野町平等寺で「阿土海岸線期成同盟会」を結成し、阿土海岸線の誘致活動に一元となることにしました。これにより、阿陽鉄道と富岡町鉄道敷設期成同盟会は解散しました。しかし、引き続き阿土海岸線のルートを通り「平地線案」と「沿海線案」の誘致合戦は続きました。 最終的に政府は、現行の牟岐線のコースを採用することを決定しました。その決定には「中島（平島村）出身で鉄道省高官であった山田隆二（略）の大きな影響力があったといわれている」（『阿波学会紀要第41号』）とされ、政治的な要因が示唆されています。 阿南市内の各地区が阿南駅をどのように捉えているかを判断するには、かつて「平地線案」と「沿海線案」のどちらを支持していたかを振り返ることが参考になります。 誘致合戦の期間中、昭和7年には長生、桑野、新野の3町が鉄道大臣に対し「平地線案」の導入を求める陳情を行いました（『新野町民史』）。そして、昭和8年には長生と宝田も鉄道省などに対し「平地線案」の導入を要請しています（『阿波学会紀要第41号』）。また、羽ノ浦は起点を羽ノ浦駅ではなく古庄駅にしてほしいと要望していました（『阿波の交通下』）。 この事実を現在の地区別で見ると、「平地線案」を支持した地区は、羽ノ浦、中野島、宝田、長生、桑野、新野、そして沿線より西側の大野、加茂谷を加えた8地区であると分かります。一方で「沿海線案」を望んだ地区は「沿海線案」沿線の那賀川、横見、富岡、見能林、橋、福井、椿の7地区と理解できます（表1）。 したがって、これらの阿南市内で比較的広大な面積を擁す、市内の半分以上の地区は、「沿海線案」に位置する阿南駅を本質的に必要とせず、つまりは、わが市のターミナルやハブ機能が必ずしも現在の阿南駅の場所に所在しなければならない必要性がなく、ひいては阿南駅周辺地区を阿南市の中心拠点とみなす考え方にも、タテマエ以上の現実的な理解は持っていない可能性が高いことを示唆していると言えます。 なお、今後の高速道路の開通後は、橋、福井、椿の3地区は徳島市への連絡が鉄道よりも高速道路の利用が優位となり、「平地線案」支持側に移る可能性も考えられます。（G氏）</p>	<p>阿南駅周辺地区は、市内で唯一人口集中地区（DID）となっている地区です。そのなかで、市の中心市街地が形成されるとともに各種の都市機能が集積し、道路等の都市基盤が整備された地域である阿南駅周辺地区については、「都市拠点」と位置づけています。都市拠点では、都市機能の誘導の考え方を「市民の多様な学びを支えるとともに日常生活から離れ娯楽や憩いを楽しむため、全市民的・広域的な教育、文化、情報、娯楽などの都市機能の集約を図る」としています。</p> <p>一方、都市計画区域外の新野地区は「集落拠点」と位置づけ、「地域住民との協働により既存の医療・商業施設等の保全、活用」を図ることとしています。集落拠点では、これまでの集落の成り立ちなどを踏まえ、郊外部の郷土に住むことを希望する市民等の多様なライフスタイルや居住地選択を尊重し、地域住民との協働により日常生活に必要な最低限の各種サービス施設の保全を図り、地域の歴史や文化を継承することを基本的な考え方としています。</p> <p>これらの拠点の位置づけは、昨今の全国的にみられる人口減少社会、及び本市でみられる人口減少の状況等から懸念される問題を踏まえた「多極ネットワーク型都市構造」の形成を目指すという考え方が前提にあります。また、拠点の位置づけについては、都市計画区域内外の関係、及び現状の民間施設を含む都市機能の集積状況、人口の集積状況、都市基盤の整備状況等を総合的に勘案し設定しています。</p> <p>本市では、上記の都市構造の基本的な考え方に即して本計画の策定に取り組んでいますのでご理解ください。</p>
26	その他	<p><誘致合戦中の県南部のスタンス> さらに客観的に阿南市以外の県南部のスタンスについてみると、『新野町民史』によれば、昭和4年には新野町の町長や町議たちが「建設予定線の阿南通過についての陳情協力をえんがため、海部郡の三岐田、日和佐、牟岐、浅川、川東、川西、鞆奥の各町村を歴訪して同意を得ている」としています。これから海部郡にとって、徳島市へのアクセスが短縮される「平地線案」が好意的に受け入れられていたことが分かります。 さらに、那賀町も「平地線案」を支持しているとみなすのが妥当です（表1）。 また、昭和7年には新野町が新野馬場への駅設置を求め、高知県代表と共に鉄道省や衆議院議長に対して陳情を行っています（『阿波学会紀要第41号』）。これは、徳島と高知を結ぶ路線ができるだけ短距離となる「平地線案」を、高知県としても理解していたことを示唆しています。 これらの要因から、阿南駅は政治的な要因によってなかば強引に生まれた性格が強い駅と言え、阿南市または県南部全体の移動実態や住民ニーズから自然発生的に望まれ、支持されてきた圏域の中心駅という視点を採ることは難しいでしょう。 <鉄道以前も内陸が主体> 『徳島県史 第5巻』によれば、徳島県は吉野川流域の東西交通が早くから鉄道によって行われましたが、徳島～阿南の南北交通は乗用馬車とその役割を果たしていたとされます。明治時代の終わり頃には徳島から羽ノ浦までの間に乗合馬車が運行され、さらに大正時代初めには桑野まで路線が延長されました。同書にはそれ以外の乗合馬車路線の記載は見られません。乗合馬車の時代において阿南市や県南部にとっては 徳島～羽ノ浦～桑野 の交通が主体であったことが読み取れます。 『阿波の交通上』によれば、織田信長は安土城から京の都までの36丁を1里として、1里ごとの路傍に松を植えさせた。徳川家康は東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道の5街道を定めた。同様に阿波では、徳島城を中心として各方面に向かう淡路街道、伊予街道、川北街道、土佐街道、讃岐街道の「阿波5街道」が定められ（図2）、これの36町ごとに松を植えたものが「一里松」とされている。 阿南市においては土佐街道が 立江～南島～桑野～福井～田井 のコースをとっています。 また一里松の所在地は、小松島市田野、羽ノ浦町宮倉、上中町岡、長生町明谷、桑野町、福井町下福井動々原、福井町小野 とされ、なかでも上中町岡の一里松は「藩政時代土佐本道の要衝で伝馬所も置かれていた」（『阿波の交通上』）と重視されていた。 さらに阿波独特の制度として主要街道に位置する8ヶ所の寺院を「駅路寺」と指定しましたが、土佐街道では桑野町の梅谷寺と日和佐の打越寺の2ヶ所が指定されている。 江戸時代の藩政の視点で見ると、やはり「平地線案」に沿ったかたちの交通を主体としていたのは明らかです。このように歴史をひもとくと、県南部の地理特性においては阿南駅の位置が必ずしも絶対的に中心拠点として死守せねばならないほどのものではないことは明らかです。（G氏）</p>	

No.	項目	意見の概要	市の考え方
27	その他	<p>■阿南駅の需要は本当に自然発生なのか 2019年（令和元年）6月の市議会で、当時の岩浅市長は阿南駅が学生の利用が多いことを強調しました。「阿南駅は県内で徳島駅に次いで乗降客が多い。これは学生が多いんです。朝の8時10分過ぎに富岡のまちを歩きますと、自転車に乗って富岡西高校から阿南光高校、そして西出口に行きますと、富岡東高校へ男女の生徒がずうっと長い列をつくって、まさに学生のまちなんです」と述べました。 しかしながら、学生の多さから阿南駅が重要であると主張することは本質的には誤りです。ほんとうに重要で代わりの効かない駅であると言えるのは、その地域に根ざした動かしがたい需要、つまり大規模な民間産業が存在したり、主要な観光地があったりする場合であろう。 たとえば、仮に前述の牟岐線の当初案である長生町経由の「平地線案」が実現していて、日亜化学工業の本社近くに上中駅があれば、その駅は代わりの効かない重要な駅であると言えるでしょう。 しかし、学校などの公共施設は行政の判断によって容易に場所を移転させることができ、その立地場所には代替案が存在します。学校や公共施設は行政自身が方針を決めれば阿南市内のどの駅周辺に移動させてもなんら問題がないものです。したがって、駅の周りに公共施設にちなむ需要があるからといって、阿南駅が重要であると行政が主張するのは詭弁です。 実際に阿南地域では、新野高校と阿南工業高校が統合して阿南光高校が設立された際に、駅に近い新野高校ではなく、駅から遠い阿南工業高校をわざわざ本校として選び、そのとき南部住民からは反対運動が起こっています（図3）。この決定は行政が恣意的に新野駅の利用者数を減らし、阿南駅の学生利用を増やしたとみられることもできます。これは行政による一種のマッチポンプと言え、すなわち阿南駅がしらすく自然発生的に重要なものと扱うのは説得力を持ちません。富岡地区は元来、那賀町や勝浦郡など各方面への分岐点などといった交通の要衝でもなく、現在の阿南駅のポジションは市内のどの駅であっても形成できる程度のもと考えます。まして現代主要な光産業は「平地線案」側の文明であり、その恩恵を「沿海線案」側の成長につなげる構造は不健全だ。この点からもやはり阿南駅は純粋な民間ニーズではなく政治・行政的な効果で成立している側面が強い駅と言える。（G氏）</p>	
28	その他	<p>■木米志向の前向きな考え方をしていない 県南部における鉄道の利用減少の理由は、県南部地域の住民が車を利用し、やはり牟岐線の当初案「平地線案」に沿った長生地区を経由することに利点を感じているからです。更に、阿南市での高速道路の開通はこの傾向を一層促進します。 徳島駅から阿南駅までの普通列車の平均所要時間は47分ですが、高速道路を利用すると徳島沖洲ICから阿南ICまでの所要時間は14分、桑野ICまで20分、新野ICまで24分、薬王寺すぐ手前の美波町日和佐出入口まで37分と、驚くべき速さで移動できます。 阿南駅の乗降客数は2千人強ですが、対照的に国が予測した桑野道路の交通量は1万4千台に達します。 そもそも高速道路を考慮せずとも非常に厳しい状況を指摘する新聞投稿もみられ、この状況で阿南駅に依存した事業を進めるのは見通しが甘いと云わざるを得ない。 富岡をターミナルやハブ、中心拠点にしようとする考え方は時代錯誤であり、もはや現実的ではないと言えます。阿南駅周辺を整備する必要はなく、この事業は撤廃すべきである。（G氏）</p>	
29	その他	<p>■長生短路線を建設せよ 牟岐線を維持し競争力を強化するために真に必要なことは、阿南駅周辺を整備することではありません。かつての「平地線案」と同様の、羽ノ浦～古庄～南島～日亜化学本社前～長生～桑野に短絡線を建設しそちらを牟岐線本線とし、阿南駅はその短絡線を含む「平地線案」コース内に移転すべきです。さらに、現行の羽ノ浦～阿南～桑野はJRから経営分離して沿線地区の負担によって維持すべきだと考えます。それによって、現在の取りこぼしている徳島市から巨大企業への通勤需要に対応できるほか、海部郡など県南部から徳島市への短絡路ともなり、牟岐線の全体的な底上げが期待できます。また、学生に限らず先細ることが明白な現行の阿南駅よりも多い乗降客数が期待できるでしょう。そもそも学校や公共施設なども「平地線案」の駅周辺に移転すべきなのです。 阿南市のまちづくり方針は根本的に転換し、富岡にこだわる内向きの考え方を超えて、すなわち都市計画や「阿南市総合計画」などのいかなる上位計画であっても神聖視せず見直し、高速道路に対抗するのではなく受け入れて前向きに鉄道と共存し、成長効果を最大化できることが明らかなインターチェンジ周辺や、新しい牟岐線「平地線案」の駅周辺に、新たな阿南市の新都心を形成すべきではないでしょうか。 それが阿南市全体、県南部住民全体にとっての理想に近い交通の形ではないでしょうか。現行の「沿海線案」コース（羽ノ浦～阿南～桑野）のままでは一部地域のためにしかなっておらず、全体的には不幸をもたらしています。阿南市は成長発展すべきであるが、それが富岡付近でなければならない理由はどこにもないことを肝に銘じなければなりません。（G氏）</p>	
30	その他	<p>■道の駅凍結は、後ろ向きの極致 阿南市は2020年2月に福井道路の新野インターチェンジ付近で予定されていた新しい「道の駅」の整備計画を、「採算性が懸念されるため」として凍結しました。 表原立磨市長は「将来的に市の財政負担が生じないよう、計画を見直したい」と当時の新聞記事で述べています。 しかしながら、阿南駅の乗降客数は2千人強ですが、国が予測した阿南安芸自動車道・福井道路の交通量は1万668台です（平成26年四国地方整備局・一般国道55号福井道路事業再評価より）。常識的に考えると、新野「道の駅」に関連する事業よりも、阿南駅に関わる取り組みのほうが将来的な懸念要因は大きいと思われる。 高速道路が通過する小松島、美波、牟岐、海陽のいずれも、インターチェンジに対応した町の中心機能の移転や振興策、防災事業を進め、鳴門や板野、美馬もICに対応した道の駅を設置しました。阿波市はICが1つしかなかったが、2つ目のスマートICを要望し、実現させ、その近傍に市役所の新庁舎を移転しました。阿南市は逆に、いくつものICが設置される恵まれた状況であるにもかかわらず、それを活かす対応策が一つ見えてきたかと思えば整理対象にした。その一方で、阿南市内で高速道路に最も近いレベルの地区である富岡の駅の振興に執着するなど、あきらかに方向性がずれており、世の中全体の流れが見えているのかと疑問を感じる。（G氏）</p>	<p>道の駅は、道路利用者のための休憩機能や地域の情報を提供する情報発信機能だけでなく、地域活性化のための一つのツールとして、その役割が期待されています。しかし、道の駅の整備に当たっては、「採算性」「地域振興」「防災」等、様々な視点での検討が必要であることから、これらを十分に考慮し、長期的かつ広域的な視点での調査・研究が必要であると考えています。</p>
31	その他	<p>■図書館を切り離せ 『阿南駅周辺まちづくり基本計画（素案）』およびこれまでに策定された上位計画は、図書館をまちづくりの付属品として見なしているように見え、図書館の本質的な役割を曖昧にしています。純粋な図書サービスの提供や文化行政の適切な成長を損なう計画と感じられます。駅周辺整備と図書館は完全に切り離すべきです。まるで既得権のように、富岡地区に図書館や市の中心拠点が存在することが当然の前提であるかのようにしている方針そのものが疑問です。（G氏）</p>	<p>現在策定中の『阿南市立新図書館基本計画』では、新図書館を阿南市の新たな中央図書館と位置づけ、図書館の基本的なサービスの充実について基本方針を定め、そのうえで、「賑わい・交流を生み出す中心施設」として図書館が持つ情報資源やネットワークを活用し、地域の魅力や特色を発信することで、阿南駅周辺エリアの活性化にも貢献することとしています。 一方、まちづくりの視点からは、新たな図書館がこれからのまちづくりの核となるものとして捉え、駅周辺のまちづくりと新図書館整備の相乗効果によりさらなる賑わいを生み出すことを前提として『阿南駅周辺まちづくり基本計画』を検討しております。</p>

No.	項目	意見の概要	市の考え方
32	その他	<p>■女性の権利について 上位計画である徳島東部都市計画区域マスタープランを拜見しましたが、私は人口減少に関する徳島県の対応について、重要な懸念を抱いており、以下にその理由を説明させていただきます。</p> <p>まず第一に、人口減少自体が「問題」として捉えるべきかどうかについてです。近年、人口減少は一部の地域や国々において自然な現象として受け入れられるようになりつつあります。人口減少は単に出生率の低下によるものではなく、社会や経済の複雑な要因によって影響を受けています。そのため、人口減少を単なる「問題」としてとらえるのではなく、変化に適応し、持続可能な社会を築くための対策を検討する必要があります。</p> <p>第二に、人口減少に対応する際、性別平等の観点を重要視すべきです。女性は子供を産むためだけの存在ではなく、個々の選択肢やキャリア、社会参加の機会を持つべきです。人口減少対策が女性を子供を産む役割に固定することは、性別に基づく偏見や差別を助長する可能性があり、女性蔑視の印象を与えかねません。</p> <p>最後に、問題は人口減少自体ではなく、それを認識した後の対応に関するものです。人口減少が進行している場合でも、社会的な公平性、福祉、そして男女平等を尊重しながら、適切な対策を講じることが求められます。性別に関係なく、地域社会全体が協力し、将来に向けた持続可能な社会を築くための努力を続けるべきです。</p> <p>したがって、阿南市においては、人口減少への対応を検討する際には、性別平等の原則を重視し、女性が生き生きとした選択をすることはすべて女性自身の権利であるとし、全ての人々に平等な機会と権利を提供する取り組みを推進していくことが、より建設的かつ公平なアプローチであると考えます。女性だけでなく、男性も含むすべての市民が、子供を育てることや家族を支えることに貢献できるような社会を築くことが重要です。</p> <p>人口減少を課題と呼ぶ代わりに「持続可能な人口政策」や「未来の世代のための社会的な支援」など、より包括的でジェンダーに中立な言葉を使用することで、社会全体がこの問題に共感しやすくなり、多くの人々が協力しやすくなるでしょう。女性だけでなく、男性も含むすべての市民が、子供を育てることや家族を支えることに貢献できるような社会を築くことが重要です。</p> <p>この新しい言葉遣いを採用することで、私たちはジェンダー平等の原則を尊重し、持続可能な未来のために共に取り組む姿勢を示すことができます。市民の協力を得るために、このようなアプローチを検討いただければ幸いです。</p> <p>共感と協力を呼びかけるために、新しい言葉遣いを選択することが、市長としての力強いリーダーシップの一環となるでしょう。今後の政策立案において、これらの観点をふまえた議論と施策の検討をお願い申し上げます。(H氏)</p>	<p>『阿南市立地適正化計画』、『阿南駅周辺まちづくりビジョン』では、人口減少は現状として捉えた上で、そのことが続くことにより人口密度の低下が進行し、商業・日常生活サービス施設等の維持が困難になること、中心拠点としての機能低下が危惧されることを問題点の一つとして捉えています。</p> <p>そのため、『阿南市立地適正化計画』では、阿南駅周辺地区に関係する課題として「①市人口の減少抑制と地域コミュニティの適正な人口規模の確保」、「②J R阿南駅周辺の求心力低下の改善と各地域の拠点での生活サービス機能の保全、充実」を掲げています。また、『阿南駅周辺まちづくりビジョン』では、課題の一つとして「阿南駅周辺に人を呼び戻す取組が必要」を掲げており、本計画では、これら上位計画や『阿南駅周辺まちづくりビジョン』における現況、問題、課題に基づき基本方針を設定していますのでご理解ください。</p>
33	その他	<p>■簡潔な表現について まず、市のホームページや広報誌などで使用されている語句について、一部違和感のある表現が見受けられます。また、市の施策の中には、外来語や英語など、意味がつかみづらい用語が頻繁に使用されているのも気になります。</p> <p>1. 「まちづくり」は「街作り」と漢字表記されるのが一般的だと思います。言葉の意味が明確で、より意味が理解しやすくなるでしょう。</p> <p>2. 「健幸」という表現は、「健康と幸福」と分けた方が、より一般的に理解されやすく、意味が伝わりやすいと思います。(H氏)</p>	<p>「まちづくり」については、ハードな側面から街を作るという意味とともにソフトな取組も含めて「まちづくり」を使うことが多く、上位・関連計画のほか、本計画についてもソフトな取組も含めて「まちづくり」として使っています。</p> <p>今後、用語に注釈をつける等、一般的に理解されやすい記載に努めてまいります。</p>
34	その他	<p>■基本計画の透明性向上を求めて 市の基本計画について、いくつかの懸念点があり、ご指摘させていただきます。</p> <p>まず、市民へのヒアリング、審議会、企業へのヒアリングを経て基本計画となった流れを図示されておりますが、それぞれの意見をどのように反映したのか不明瞭で、不安を感じています。</p> <p>また、まちづくりの課題にしても、現状の認識が不足していると懸念しております。</p> <p>例えば、「交流人口・居住人口を維持・拡大していくため」と論じられておりますが、なぜ維持・拡大する必要があるのか理由が示されていません。さらに維持・拡大するとその後どういう効果があるのかもまた示されていません。これではこの政策を実行する動機が見えてこず、市民としては市が政策を行うのに現状把握と将来の見込みが不十分であると見なされるを得ません。</p> <p>こうした現状把握の不足、将来の見込み予測の不足は基本計画の多くの部分で見られており、もしこうした分析と予測がデータと共に提出されないのであれば、今後基本計画は大きく失敗する可能性をはらんだ危険性の高いものであると言わざるを得ません。</p> <p>万が一私の指摘が該当していた場合は、市は早急に現状把握と見込み予測を立て、基本計画を練り直すことを強く願います。</p> <p>データの具体的な取りまとめ方につきましては、明石市の現状と課題をまとめたレポートが参考になると思います。ぜひご覧くださいませ。</p> <p>https://www.city.akashi.lg.jp/doboku/kousei_ka/shise/shingikai/ichiran/kotsukaigi/document_s/n04_genjoutokadai_1.pdf (H氏)</p>	<p>各種ヒアリング、審議会の意見については、審議会の場で各意見とその対応について報告・確認を行っており、阿南市魅力ある都市づくり審議会については、市ホームページの阿南市魅力ある都市づくり審議会に関するページにおいて、各回の会議録の要旨をご確認ください。</p> <p>また、まちづくりの課題については、『阿南市立地適正化計画』、『阿南駅周辺まちづくりビジョン』において、人口減少は現状として捉えた上で、そのことが続くことにより人口密度の低下が進行し、商業・日常生活サービス施設等の維持が困難になること、中心拠点としての機能低下が危惧されることを問題点の一つとして捉えています。</p> <p>そのため、『阿南市立地適正化計画』では、阿南駅周辺地区に関係する課題として「①市人口の減少抑制と地域コミュニティの適正な人口規模の確保」、「②J R阿南駅周辺の求心力低下の改善と各地域の拠点での生活サービス機能の保全、充実」を掲げています。また、『阿南駅周辺まちづくりビジョン』では、課題の一つとして「阿南駅周辺に人を呼び戻す取組が必要」を掲げています。「交流人口・居住人口を維持・拡大」については、これら上位計画や『阿南駅周辺まちづくりビジョン』の現況・課題に基づき、阿南市の経済・活力・地域コミュニティの維持のためには必要と考えております。</p>
35	その他	<p>■ワークショップ、ヒアリングについて 市が行っているまちづくりワークショップについて、以下の点についてご指摘申し上げます。</p> <p>まず、コロナ禍において、ワークショップは密室に近い空間で行われるため、感染リスクを懸念して参加しなくても参加できない人がいるのではないかと思います。オンラインでの参加も可能であれば、より多くの人が参加しやすくなるのではないのでしょうか。</p> <p>また、ワークショップの意見の導出は、JR阿南駅周辺を盛り上げることが前提となっているのではないかと感じました。駅周辺以外で阿南市全体を盛り上げるアイデアも、市にとって聞く価値のあるものではないかと思います。多様な意見を聞くためのワークショップの在り方も、一つの方法ではないかと思います。</p> <p>西側に位置する商店街の復興は市にとって重要ですが、その実現には大きな力が必要です。店主の声を聴きながらも、バランスを取った計画を立て、阿南市全体の発展を考えた計画を求めます。</p> <p>「市民活動やイベントはオープンスペース等の外から見える場所で行うことが重要である。外から見えることで多くの参加者を募ることが可能となる」という意見がありますが、私たちのコミュニティが外から見える場所で行われることについて、いくつかの懸念があります。確かに、そうすることで多くの人に見てもらうことができ、参加者を募ることもしやすくなる可能性があります。しかし、私たちのコミュニティの一体感やアイデンティティも同じくらい大切です。外から見える場所でのイベントでは、地元の人々とのつながりが薄れ、特別な瞬間が失われるかもしれません。騒音や人混みが問題になるようなイベントや、安全対策が難しいイベントは、オープンスペース等の外から見える場所では開催することが難しいでしょう。また、特定のコミュニティで行う活動や、参加者を限定したイベントなどは、オープンスペース等の外から見える場所で開催する必要がないこともあります。</p> <p>また、プライバシーも考慮していただきたいです。外から見える場所でのイベントは、個人や家族のプライバシーに影響を及ぼす可能性があります。私たちは皆、自分たちの生活を尊重される権利がありますので、これにも注意を払っていただきたいです。</p> <p>市民活動やイベントを開催する場所は、その目的や内容によって適切に選定すべきであり、一概にオープンスペース等の外から見える場所が最適とは言えないと思います。</p> <p>繰り返しになりますが、現状把握となる詳細なデータや数値と将来の見込み予測がここでも不足しています。市は早急に現状把握と見込み予測を立て基本計画を練り直すことを強く願います。</p> <p>最後に、私たちは市の透明性と市民への説明責任を高め、より包括的なまちづくりに向けた努力を期待しています。どうぞよろしく申し上げます。(H氏)</p>	<p>ワークショップは感染リスクに十分配慮して実施しましたが、参加しなくても参加できない人への対応としてオンラインでの参加も可能な取組については今後検討を進めていきたいと思っております。</p> <p>今回のワークショップのテーマは、計画の対象地がJR阿南駅周辺地区であったため、駅周辺のまちづくりを対象としましたが、駅周辺以外のアイデアを聞くことなどについては、今後の取組の参考とさせていただきます。なお、本計画では関係団体ヒアリングを通して商店主からのご意見もいただいております。</p> <p>市民活動やイベントを開催する場所は、一つに限定されるものではなく、目的や活動内容によって屋内外を問わず様々な場所があって良いと考えます。今回提案しているオープンスペース等の外から見える場所は、選択肢の一つになれば良いと考えております。</p>